39

「遺」

三九　★　遺

今年はこの経験をするのがちょっと早すぎた。
リップをなくしたと思って買い直したらそのあとで見つかる、あの現象。
渋々ドラッグストアで代わりを買って帰ると、あとからひょっこり出てくる。早い時は本当にすぐ、ポケットの中から。「あれここ絶対探したけどな」そんな独り言をつぶやく。
まぁいい。用途別ということにしよう。ひとつは持ち歩き用。もうひとつは入浴後用。意味があるのかはわからないが、そうやって自分を納得させる。

リップやハンドクリーム、目薬などはなくしやすい部類に入る。いつも持ち運んでいるものだから、無理もない。でも、洗面台に置いてある、あの『名探偵コナンのハンドクリーム』だけは例外だと思う。いつからかこの場所が定位置となっており、神聖視しているわけではないものの、消耗品にもかかわらずめったに使われることがない。
正直、なんとなくただ取っておきたいと思ってる自分がいる。

誰にでも、大切にしたい過去の仕事の遺物……仕事でなくてもクラブ活動でも、人から何気なくもらったものでもなんでも。そんなものってあるのではないか。
このハンドクリームは僕にとってそんな存在で、たまにふと思い出して手に取り、お店に置いてあるテスターを扱う

がごとく慎重にキャップをひねり、ちょっとだけ中身を出してみたりする。手を潤したいのではない。なぜって、『苺ティー』の香りが記憶をくすぐり、『いい瞬間』を見させてくれるから。

そんな品が他にもいくつかあり、例えば舞台『転校生』のときのローファーや、ある現場での非売品のハンドタオル、思いのこもった手紙など。自分以外の人にとってはとりとめのないものだが、きっとこういうものこそが財産と呼ぶにふさわしい。

僕たちは過去に生きてるわけではないが、過去の連続が今に連なり、今を生きてる。
その途中で得たもの、失ったもの、
その両方が、折に触れてそっと声をかけてくる。
“やあ調子はどうだい”そんな感じで。

今という瞬間瞬間は移り変わるのだから、どんな状況にあっても、前を向けたら。そんな風でいられたら。
あのハンドクリームの香りが僕にすこしの勇気とやすらぎを与えてくれるように、僕も世界中どこかの誰かにとってそうなりたい。

今をただ生きてみる。

なくしたリップクリームみたいに、ひょっこり答えが見つかるかもしれないのだから。